周藤弥兵衛銅像建立「大志の郷」（案）
構想打ち合わせ

平成１９年２月２６日

財団法人人間自然科学研究所

周藤弥兵衛銅像建立「大志の郷」（案）構想打ち合わせ

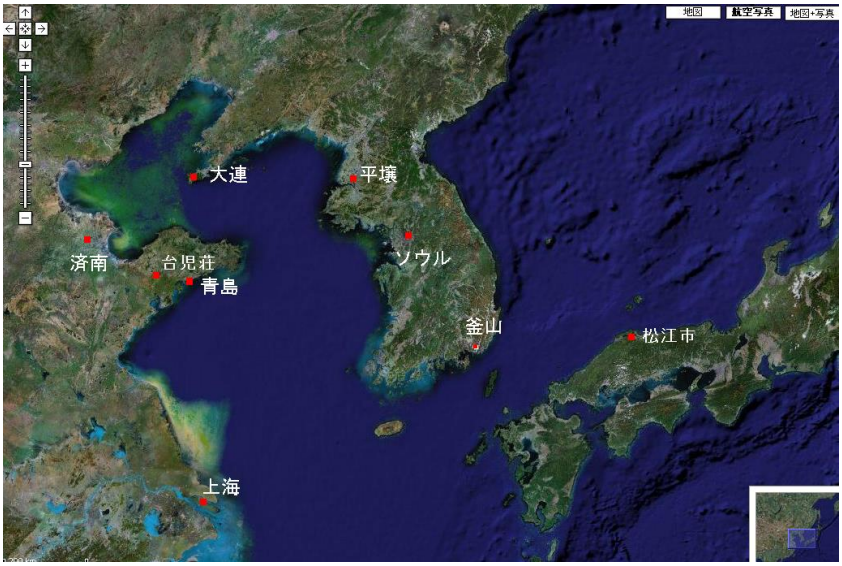
日時　2月26日（月）　13:30～14：30

場所　松江市役所第３別館201会議室

松江市側
農林課（欠席）
都市計画課
公園緑地課
三島敏郎　松江市八雲支所　支所長
米田正道　　八雲支所　グリーンツーリズム推進室長
青山一春　　鹿島支所　支所長
中村勢次郎　　市民活動推進課　課長補佐

周藤弥兵衛顕彰会
石原茂　　会長
亀山英嗣　　会員（蔵本総建コンサルタント　一級建築士）

財団法人人間自然科学研究所
小松昭夫　　理事長
古賀隆昭　　理事
山本謙　　理事
佐々木武男　理事
坂本巌　　理事
堀江研次　　研究員（書記）



目次　　ページ

松江市との協議日時、出席者	2
「大志の郷」構想案	4
財団法人人間自然科学研究所あいさつ	6
周藤弥兵衛顕彰会あいさつ	7
松江市八雲町説明	7
「大志の郷」概要説明	8
周藤弥兵衛の歴史的意味	13
松江市あいさつ	15
国道残地利用案説明	15
清原太兵衛銅像設置計画説明	17
顕彰事業に関する国際的な関心	19
資料	22

八雲「大志の郷」構想申請（案）

松江市長　松浦正敬　殿

今内閣の「美しい国」のモデル事業として
松江市八雲町日吉に「大志の郷」建設を申請します

島根県松江市八雲町日吉にある､国道４３２号線改良工事残地(不定形･活用困難地)、旧八束郡八雲村農村公園、日吉親水公園をあわせた一帯を、売却予定の県市有地、民有地あわせて約四千八百㎡を総合的に計画し、すでに完成している郷土の偉人、周藤弥兵衛の銅像建立にあわせ、世代間・地域間・国家間交流を通じて、子供たちに科学に対する興味と夢と志が生まれる全国のモデル事業として「大志の郷」の建設を申請します。

概要

一、治水の偉人周藤弥兵衛と「日吉の切通し」

松江市八雲町は、治水の偉人として知られる周藤弥兵衛ゆかりの地です。弥兵衛は、関が原合戦で敗れた毛利氏が中国地方全域から防長二国に減封・移封されたときこの地域に留まった人で、松江松平藩で日吉村一帯の大庄屋を務めた人です。五十四歳で家督を譲り、私財を投じて、洪水の原因である、川をせき止めていた硬い安山岩質の岩山「剣山」を、ノミと槌だけで一人砕き始めました。この「日吉の切通し」は弥兵衛が九十七歳のときに完成、翁は百二歳で亡くなりました。洪水が治まったことで村には多くの新しい農地が生まれました。現在でも川底にはノミの跡が認められます。この志は三代にわたって引き継がれ、松江市大庭町の美田の開発につながりました。昭和三十年代まで切通しは、下級生が上級生に泳ぎを教わるなかで、コミュニケーション能力を身に着ける場でした。近年、公園付近は新松江市内で唯一の自然親水地域として、市内の小学校に野外学習の場として活用されています。

二、周藤弥兵衛を人類史的・長寿社会日本のモデルに

周藤弥兵衛は二宮尊徳翁より百年前の人で、その生き方は地域だけではなく、長寿社会日本、そして人類の歴史の評価に値するモデルといえます。また宍道湖中海には多くの水系があり、たくさんの水の偉人を生み出し、この地域は治水と政治が同義語で語られた地域として知られています。

三、銅像は日中国交正常化三〇周年を記念して制作

周藤弥兵衛の銅像は財団法人人間自然科学研究所が、日中戦争で陸軍松江六三連隊が全滅した中国山東省台児荘にて制作いたしました。同地は米国の支援を受けた蒋介石と、毛沢東の、国共合作の地であり、中国・台湾・日本の因縁の地ともいえます。銅像はこのプロジェクトに共感いただいた多くの方々の支援を受けて、鳥取県燕趙園に建立された孔子、孟子像、そして佐太川を開削した清原太兵衛像とともに、日中国交正常化三〇周年を記念して、平和・縁結びの象徴として制作、山東省に集まった三千人の方々による送迎式典を経て神有月にあわせ日本に運ばれました。これを記念して中国政府から孫子の銅像の贈呈を受け、三月十七日に燕趙園で建立除幕式が開催される予定になっています。

四、「大志の郷」は、瑞穂の国日本を象徴

「大志の郷」設置を申請いたしました国道残地は、松江市中心部から同市八雲町に入る玄関口に位置します。同地には山陰地方で唯一、宮内庁が直轄管理している帝の御陵があり、日本文化発祥の地、朝鮮半島とのえにしの地ともいわれています。春には数十匹の鯉のぼりが意宇川の上を泳ぎ、秋は周藤弥兵衛の業績によってできた田に、黄金の稲穂が実ります。水の国、瑞穂の国を象徴する土地といえるのではないでしょうか。

五、志が芽生える郷の概要と運営

この銅像建立をきっかけに、公園一帯を世代間交流と、志の芽生える郷として造成、中海宍道湖圏はもとより、全国の水の偉人の名前と業績を刻んだ碑林を設置し、持続的に生きられる長寿社会の出発点といたします。

意宇川にはシーズンになると蛍が飛び交っています。生命科学の成果を生かし大量の蛍の養殖、これを公園敷地に沿った河川敷に放ち、長期間、蛍狩り、また宅配便で都会に送ることも出来ます。殺伐とした現代日本人に、今は見られなくなった蛍狩りが出来ることで、自然の神秘と美、生き物の死から、優しさと科学をする心が芽生える機会を提供します。

また、この趣旨に賛同する方々による市場を設け、想いと志の具現化する出会いの場を提供します。さらに蛍は町内の老人ホームやデイサービス施設で養殖していただき、高齢者と子どもたちの蛍を通じた世代間交流が生まれるようにいたします。

六、資金と顕彰

「大志の郷」は公費と寄付金で公園造成及び運営を行います。寄付された方々の名は碑林に刻み、永遠に記憶されるようにいたします。

以上、「大志の郷」を今内閣が標榜する「美しい国」のモデル事業として採択されるよう申請いたします。

平成十九年二月九日　修正文

財団法人人間自然科学研究所
理事長　小松昭夫

周藤弥兵衛顕彰会
会長　　石原　茂

財団法人人間自然科学研究所あいさつ
小松

財団法人人間自然科学研究所の理事長をしております小松でございます。日ごろは当研究所の活動にご支援ご理解いただきましてありがとうございます。出雲大社の近くに澄田知事の発案によりまして古代出雲歴史博物館ができます。日本の原点である場所は旧八雲村岩坂にあるのではないかという説もあります。今日は「出雲風土記とその社会」（佐野正巳著）という本の抜粋も付けさせていただいております。

地域起こし、活性化と言われておりますが、朝鮮半島の対岸にあるこの地域において、全国、アジアの中で役割を果たす中で、逆にこの地域の振興を図っていく。その中で不登校とか高齢化とか、そういう社会問題をも総合的に捉えて、災い転じて福とするようなプロジェクトを進めていくべきではないでしょうか。

いま官主導から民主導といわれておりますが、官も民もすべてを包含する「国民」という視点で進めていくのはどうでしょうか。

今、一国で生きられる国はどこにもありません、一地域、一企業、家庭、個人においても世界の中でしか生きられない状況です。そういう中で仮称「大志の郷」構想をまとめました。まとめるに当たっては約 20 年をかけました。ご参集の石原顕彰会会長様はじめ関係者の皆様に大変ご支援賜り、たくさんご参加をいただき、顕彰会と財団の共催という形で今日を迎えております。

今日は初めての行政側との懇談ということです。申請書はあくまでもたたき台です。政治も官も民も含めました、いわゆる国民という視点で、これを考えて行きたいと思います。

今日はこのような場を設けていただき、まことにありがとうございました。

周藤弥兵衛像は、孔子、孟子、清原太兵衛像と共に中国・台児荘で平和の想いを込めて製作された

（2002 年 9 月）

周藤弥兵衛顕彰会あいさつ
石原

周藤弥兵衛顕彰会の会長をさせていただいております石原茂です。平素は多大なるご支援を頂き厚く御礼申し上げます。さきほど理事長からごあいさつ申し上げたとおり、「大志の郷」構想を打ち出したわけです。周藤弥兵衛顕彰会も同調しまして、この大事業に取り組んで行きたいと存じます。郷土の水の偉人ということで、長く町民が感謝の気持ちを抱いています。内容についてはプロジェクターを使ってご説明申し上げたい。松江市のご支援を賜りますようお願いを申し上げまして、私のあいさつを終わります。今日はありがとうございました。

松江市八雲町の説明
亀山

八雲の亀山と申します。周藤弥兵衛顕彰会のメンバーでございます。顕彰会の中で周藤弥兵衛さんを地域でどう生かすか、八雲をどう生かすかという視点で見るとき、先ず、八雲はどういう場所かということを考えました。八雲と意宇川の流れ、御陵に代表されます古代の文化と、中世の弥兵衛さんがあります。われわれが何を考えて、子供たちに何を伝えるかということを考えるために、イメージビデオを作りました。

（ビデオ上映）

小松

山東省がこの銅像を作った場所です。出雲から倉吉までの人でつくった陸軍松江 63 連隊が、そこで全滅した場所です。今年がその全滅した年から 68 年目です。

（パワーポイント上映）

小松

孔子と孟子がセットになっているのは全国にここだけです。こういうことをすると次々と篤志家が現れました。天帝の娘といわれる西王母と、七福神のもとといわれる八仙人の像は、大阪の不動産屋さんから、ご主人が亡くなった後、困っているという問い合わせがありまして、燕趙園との間を私が仲人して、昨年三月に建立しました。漢白大理石でして、いまでは中国から国外持ち出し禁止になっています。

燕趙園　孔子孟子像の除幕　　平成 15 年 10 月

「大志の郷」概要説明

亀山

弥兵衛さんの事業の困難さをどう表現するかということで、味のある大きな巨石がありますので、それを大大胆に組み上げて、ブロンズ像をその上において、力強さを表したらどうかいなと思い、イメージしたものです。

ここの神納橋と含めて、周藤弥兵衛顕彰碑を含めた小さな公園（日吉親水公園）があると思う。旧道

燕趙園　八仙人像の除幕式　　平成 18 年3月

部分と、端から端まで合わせますと、すべての面積は４０００平方メートル以上ある、広大ではありますが細長い場所です。弥兵衛さんの切った「切通し」が見える。天皇が祭られているといわれる、宮内庁直轄の岩坂御陵も見える。そういう場所です。
ここに大きな民地があります。全体を捉えたときに弥兵衛さんのブロンズ像を建立できるコーナーが、先ず旧八雲村に入ったらある。それから八雲の象徴であります星上山が見えるロケーションがある。入ると「火の樹」のモニュメントがあります。それもあわせて整備が出来ればよいと思います。
親水公園とも、時期になりますと鯉のぼりも泳いでいる。そういう風物詩的なものも楽しめるのではないかという思いで描いております。
具体的にはクリアしなければならないものがある。ただ本当にこの事業を具体化して現実化するには何がいいかということを、計画公園内におけるオブジェの整備費、利便施設整備費などを含めて、今日、具体的な方針が出来たらと思います。

小松
研究所の経緯と、中国からどのようなプロセスで渡ってきたのかという出発式の様子を。ちょっと上映します。

（太陽の國出雲シンポジウム＝中国銅像贈呈式映像＝）上映

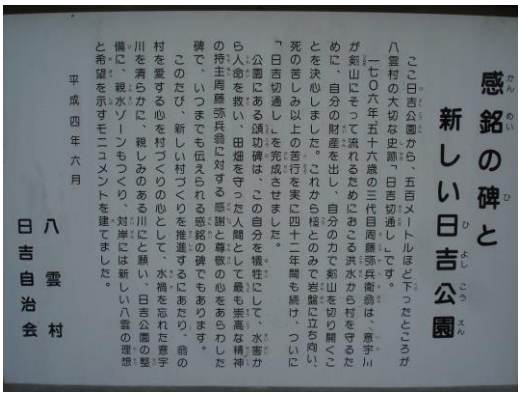
（構想案朗読＝堀江）

親水公園と日吉切通し周辺

周藤弥兵衛が変えた意宇川の流れ

①親水公園

②周藤弥兵衛顕彰碑



顕彰碑の説明文

親水公園内　東屋

親水公園内　トイレ

親水公園内　親水護岸

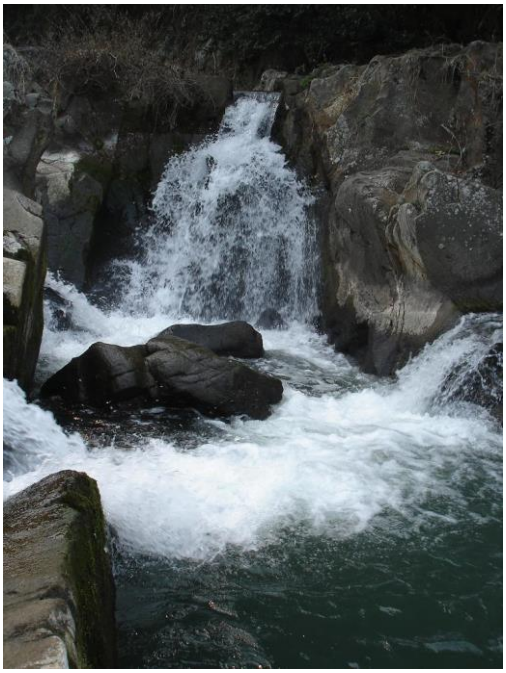
未来に向かってそびえたつ
『火の樹』

住民のコミュニティづくりをすすめ、八雲村のシンボルとなるようなものをつくろうと合併40周年を記念してモニュメント「火の樹」が完成しました。

このモニュメントは「火」をデザイン化したもので熊野大社が別称「日本火之出初之社（ヒノモトヒノデゾメノヤシロ）」とよばれ、古代から伝わる火の神事「鑽火祭（サンカサイ）」があることや、火が希望や明るさを感じさせこれからのむらづくりのイメージにピッタリということで決定。高さはおよそ13mで波状の鉄板を4枚組み合わせた細長い形状で燃え盛る炎と八雲の「8」と無限大を連想させる記号をデザインしたものです。

4本の柱には「未来」「愛情」「平和」「伝統」の精神をこめるとともに8つの穴には「発展」「連帯」などの願いを託しました。夜になるとモニュメント自体が発光するように工夫されています。

親水公園内にあったモニュメント「火の樹」



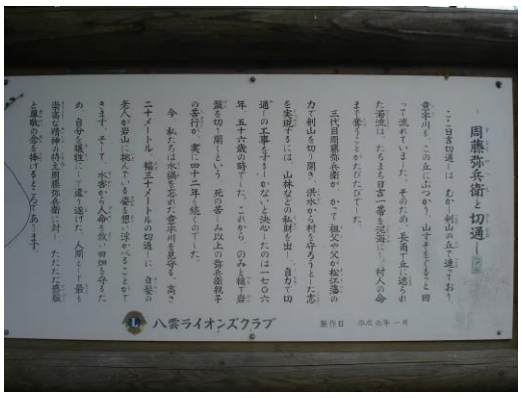
③日吉切通し　滝つぼ

日吉切通し　上部

日吉切通し　中部

数メートルの落差がある滝

堅い安山岩で出来た剣山



切通しに掲げられた説明文

剣神社に向けて長い石段が続く

④剣山の頂上にある剣神社

⑤周藤家屋敷跡

剣神社の鳥居

石垣がある屋敷跡

⑦周藤弥兵衛の墓

⑥日吉公民館

小松

どうもありがとうございました。周藤弥兵衛の本をつくるにあたりまして、初代の人間自然科学研究所事務局長をいたしました佐々木さんからごあいさついただきます。

八雲村全図

②熊野大社

③日本の起源に大きな関わりがあるといわれている、石坂神社

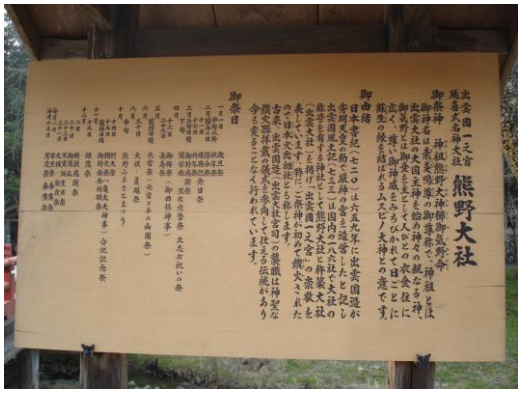
周藤弥兵衛の歴史的意味

佐々木

どうも佐々木でございます。周藤弥兵衛､清原太兵衛､大梶七兵衛、これを称して私どもは出雲三兵衛と言います。周藤弥兵衛、清原太兵衛は私が関わらせていただいた。大梶七兵衛も方向性を出して私は仕事を離れたわけですが、まず周藤、清原をわれわれどういう風に位置づけるかということ。

周藤弥兵衛の大分県中津市の山国川に、青の洞門（＝下記参照）というのがある。周藤弥兵衛が切通しを造ってから 50 年ぐらい後、18 世紀の半ばに完成しました。周藤弥兵衛は 1706 年に 54 歳で開始。完成までに 42 年間かかった。（大分県の）耶馬溪というのは、全開までが 30 年掛かっている。ノミで切り開いたのです。これが有名になったのが菊池寛の「恩讐の彼方に」（＝下記参照）。切通しは安山岩、青の洞門は凝灰岩。いま映像が出たのですが、現在でもノミの跡が残っている。これを見て東京から着てみた人はものすごく感動する。

それから清原太兵衛は前後 12 回も藩に願い出て、しかもあれは工事を 4 年でやるんです。藩の金でやるんです。これはちょうど、京都の高瀬川をつくった、角倉了以（すみのくらりょうい＝下記参照）の事業とよく似ている。まずこういうことをここら辺の者は知らなければならない。大梶七兵衛が来原の岩樋を開削したが１７００年。これからの子供たちに感激と感動を与えていかなければならない、そういうものを残していかなければならない。松江市の観光を考えれば、今、どういうことをしなければならないかです。



熊野大社から上流約 100mの地点にある、上の宮跡。幕末まで社があった

④宮内庁が管理する岩坂御陵

⑤周藤弥兵衛の菩提寺、浄音寺

松江市あいさつ

中村

今日来ていただいているのは八雲支所長さん、鹿島支所長さん、それからこちらから都市計画課の柏木、小谷さん、公園緑地課の野村課長、八雲の米田さん、河川課、ここは農林公園として農林課が管轄していますが、どうも課長さん急遽来られなくなった。他の会議が長引いてしまって。
どういうふうにして、大志の郷の中の銅像を位置づけていくかというお話を聞かせてもらって、どう対処していったらいいかなというのを、一カ所にしていけばいいかなということでセッティングしたわけです。今、市のほうからの意見をということで…。

小松

はじめはざっくばらんで、公式よりも非公式みたいな感じで。積んだり崩したりしてまとめあげていけばいいかなと思います。

中村

市民活動推進課に来られたのは、これを市長にということでしたので、課はそういう窓口をしているものですから、関係する課の方に集まっていただきました。どうですか、質問をされる方は…。

小松

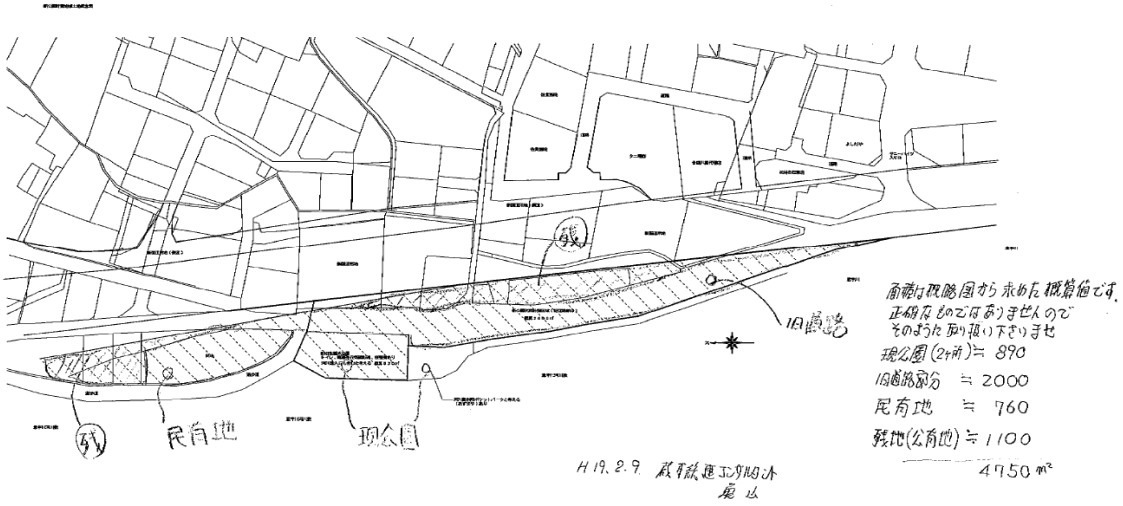
以前部長さんと一緒に（小松電機産業本社に、銅像を見に）お見えになりましたが、その後ご無沙汰しておりますので、いろいろと市側の状況を聞かせていただければと思いますが。

国道残地利用案説明

三島

八雲支所の三島ですが、本庁の部長さん方がこの銅像を見に行かれまして、これが発端でどうするかということですが、市の方でこの銅像を発端に（周藤弥兵衛を）顕彰するということは、なかなか市のいままでのあれからして、顕彰会あたりで地元の方が作られて、市に対してどの程度援助してもらえるかというのかというのが、だいたいいままでの市としてのスタンスだということで。
石原さんが顕彰会の新たな会長さんとして発足して、今日に至って、一年余りになると思います。顕彰会については、顕彰会のほうで、いろいろ進めておられる。
道路幹線については竣工しまして、供用開始になっておられる。周辺の残地といいますか、その整備であります。だいだい 18 年度 19 年度にかけて、周辺も国道としては整備が終わるということになっています。で、その跡地をどうするかということですが、公園のほうがご承知の通り農林課の所管になっております。周藤弥兵衛の顕彰碑

のことと新規公園をあわせて農林関係の所管になっています。



これが意宇川です。これが国道 432 号です。現在、ここら辺に残地がありまして、整備しております。ここら辺に記念碑（顕彰碑）が建っております。ここら辺が市立公園とか階段とかがつくってあります､ここらへんが市有地を含めまして残っています。ここら辺の一帯を農村公園親水公園として利用させていただけないかということで市の本庁に申請いたしまして、一応県とは協議が…一応終わったということでいいでしょうか。

（いやまだです）

三島

ということで進めております。一応、八雲支所としての考え方はここら辺の一帯を、公園の一帯としてお借りするなり、そういうことで整備していくということでお願いをしております。

（一部は）市の特別会計の土地でございまして、将来は処分する、売買をする予定になっております。平成３年から 4 年の時代に、八雲村時代に、5800 万円ぐらいかけまして、アメニティーゾーン整備事業ということで２ヵ年に渡って事業として整備した状況で、それを維持管理しております。ここに個人の土地がございまして、なかなか手を加えられない。一応、支所としては、さきほど話があったこの辺に県の土地がありまして、この辺から切通しが見えますものですから、この辺に銅像を設置したらどうかという案は県のほうに出させていただいて、内部では進めております。さきほど話をしましたが、この上の三角のところに八雲村時代に「火の樹のモニュメント」がございまして、上の残地のところに、今保管しておりますので、復元しようかということで、これは平成 19 年度の予算に要望を支所としております。まだ議決されたということではございません。ま、これは実現が可能であるかと思います。これは市道ということで現在整備を進めております。

今日の話は全体を公園ということでお話がありますが、いろいろ手順がありまして、すでに整備されたところに手を加えるというのは､(八雲村時代の）起債事業で、まだ残債がありゃへんかと思っています。まあ事業としてやったものですから、その辺のこともありまして、これからその事業を進めるに当たってはいろんな問題をクリアしなければなりません。支所としては、顕彰碑は顕彰碑として、場所も特定されますので、それを振興事業としては切り離してやられたほうが、物がすすみゃせんかなと。

一帯として考えますと問題がいろいろありますので、ま、そういう状況でございます。

清原太兵衛設置計画説明

小松

清原太兵衛はどうなっておりますでしょうか。

青山

清原太兵衛はですね、平成５年であったと思いますが、清原太兵衛顕彰会というのが鹿島町で出来ておりまして、研修会というのを重ねておられます。清原太兵衛銅像の件につきましてもさきほど八雲の支所長からございましたように、銅像設置されるというお話があるということを顕彰会で対応しております。ですが、どういう財源でもって自分たちがどれだけ負担するかということは伺っておりませんが、ま、佐太神社の一角に設置する案があるということは、顕彰会の方々はおっしゃっておられます。清原太兵衛はですね、２０１１年ぐらいが生誕の何周年かになる。そうしたときに記念事業として銅像を設置したらよいという話があるんです。

佐太神社

石原

道路整備はいつ終わります？

青山

道路整備の周辺が、「公園整備を」という話がありまして。

小松

そこにという話がありますね。

青山

あります。19 年度ぐらいかな。

銅像出発式で披露された清原太兵衛像（2002 年９月、中国・台児荘）

石原
桜千本の話がいつやられる話ですか。

佐々木
五年計画だけども、塩分濃度の関係を研究されるという。

青木
これは清原太兵衛さんの遺言にあったようですね。

佐々木
小説の一番後にあります。これを出版したことによって、あれを契機として始まった。もう樋門は無くなったのですか。

青木
樋門はあります。構造物はなくなって、道路は残っております。そういうことで生誕 300 年の、2011 年に向けて、いろいろ企画はありますが、まことにタイムリーな事業だと思っております。公園整備が 19 年度ですか。そのあたりに事業が進んでいくと思う。清原太兵衛が佐太川を掘ったために一番発展したのが鹿島町の恵曇。海上の交通が出来て、魚を直接松江に販売ができる。そういうことで潤った。もう一つ、洪水が解消されることで生馬とか古江とか、あの辺の田んぼが水に浸かって稲が出来ないというのが、佐太川が開通したために洪水がなくなってお米が出来るようになった。生馬の方では非常に清原太兵衛の顕彰は必要なものではなかろうか。鹿島町だけではなくて、周辺も一緒になって清原太兵衛の顕彰をやっていくような機運はあります。

佐太神社にある清原太兵衛顕彰碑

（松江市担当者）
公園のことで追加させていただきたいのですが、当初は 19 年度という計画で進んでいたのですが、今年度を含めて３カ年で進めて行きたいと思います。

小松
それはどちらで。

（松江市担当者）
清原太兵衛です。一応、公園を整備するところが全部で約 400 平方メートルですが、そこの中に公園の整備をあわせて（銅像を）どうだろうかということですけれども、

ま、整備のほうは今年度も含めて三カ年計画で進めさせていただくということで進めています。

三島
松平不昧公が佐太神社にお参りした石碑が建っていますね、そういう由緒ある場所でもある。

顕彰事業に関する国際的関心
小松
いままでの経緯はですね、周藤弥兵衛、清原太兵衛、大梶七兵衛と、さきほど出雲三兵衛といいましたね。漫画、児童文学と小説、これを３点セットで作っています、それから朗読テープをセットでつくっています。
実はこれについて国連で非常に関心を持っていただいておりまして、近いうちに元国連大学事務局長をなさっていた伊勢さんという方がお見えになる。教育がいろいろ問題になっておりますが、先人に学ぶということを戦後非常におろそかにしてきた。こういうことが教育荒廃とかの根っこにあるということから、これを国連としてもそういうことに関心をもっている。
いまこれを漫画の本を翻訳したいということで中国でも検討されている。地元としてももう少し、こういうことをやはりプロジェクトチームをつくって進めるということも、非常に重要なことではないでしょうか。
周藤弥兵衛は出版当時、優秀感想文を募集しました。全国の水の偉人を顕彰する大会を、できたら定期的に開きたいなという構想も持ち上がっております。

佐々木
この像は、これ（本）がもとなんです。これは高田勲さんという赤来町出身の方が（挿絵を）描いている。

小松
その方がデザインした銅像です。

佐々木
清原太兵衛の小説のほうの挿絵は、安達正幸さん（故人）。

小松
周藤弥兵衛はですね、あの、児童文学だけが村尾靖子という地元出身の方。地元出身と言っても山口の生まれですが、江津にお住まいです。挿絵は高田先生、漫画の本と小説は東京の方に描いてもらっている。
清原太兵衛はこういうことを通じて人材の発掘をしようということで、小説を募集しました。地元からたくさん応募があり、全国からも三十何作もの応募がありました。寺井敏夫さんが入選されまして、それからいろんな本を書かれるようになりました。

佐々木
寺井さんはいろんな小説を書かれるようになりましたが、これがきっかけです。

小松
それから三作目はぜひ漫画家も地元で養成したいということで、寺戸さんという方が、

「ぜひ自分もチャレンジしたい」ということでやっていただきました。大梶七兵衛の三作はすべて地元の人で作ってもらった。今は寺プロというプロダクションをつくって、たくさんのいろんな漫画の本を作っている。
こういう事業で大事なことは人材の発掘と養成、そういうことを通じて、こういうことが出来るような機運と場を提供するということが一番大事なことです。
こういうことをやっているということを、ご理解いただきたい。周藤弥兵衛の紙芝居は幼稚園で使われている。切通しの現場で、行楽を兼ねて紙芝居をやるということが何回か行われている。
二宮金次郎が全国的なブームになっておりまして、それよりも周藤弥兵衛が 100 年古い。全国のモデルに十分なりうるという機運になっております。

佐々木
この前栃木に行ってきた。（二宮尊徳ゆかりの）二宮町。ここは二宮尊徳の桜祭りの建て直しをやっている。金次郎も大切だし、郷土のものを掘り起こしてやっていくということが大切だと思う。

小松
これは本当にきちっとやらないと、逆にこの地域の指導者層の見識を、全国世界で疑われてしまうということにもなりかねません。非常にある面では恐ろしい面を持っていますので、ここでちゃんとした体制をつくらなければいけないということで、急きょ、その波紋が広がり出してきたものですから、こういう具合に。

佐々木
清原太兵衛のときに読書感想文を募集したのですが、あれを読んでみると、大人は何をやるべきかということが良く分かる。これは鹿島町にもありますし、感想文の子供のところだけ読んでください。いま何をわれわれが伝えるかということが実におざなりになっている。そういうことに一番焦点を当てております。

中村
顕彰会のお話を聞かさせてもらって、それから市の対応をということです。

小松
今日はこのような場を作っていただきありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします、後、窓口はどのように…。

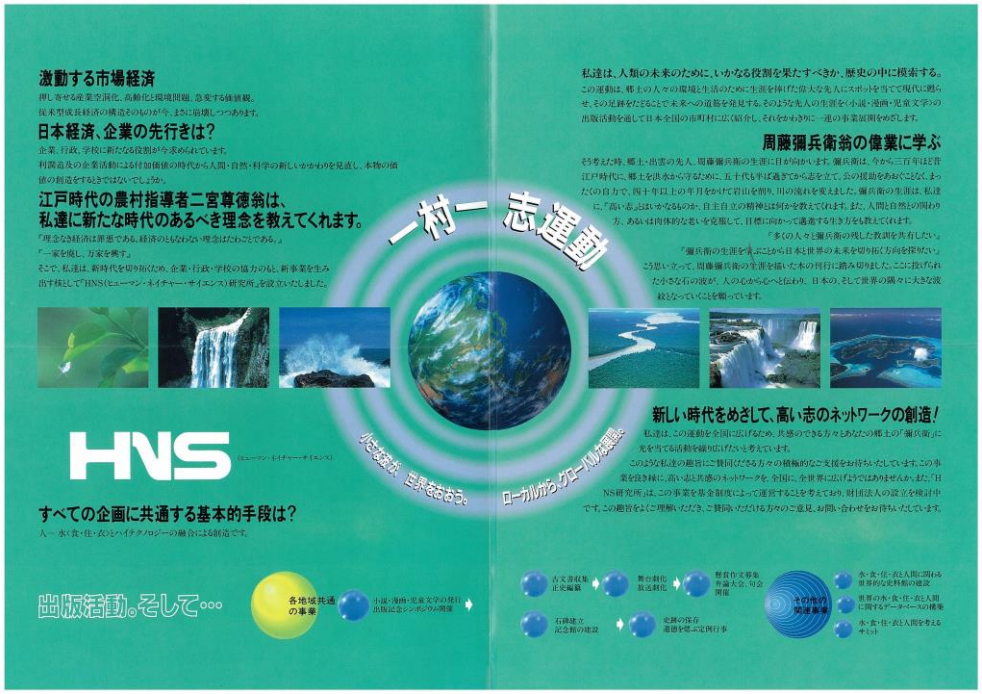
中村
窓口はまだ。

小松
じゃあご連絡いただくということで。それから今日お見えにならなかった課長さんもいらっしゃる。またご連絡いただくということでよろしいでしょうか。

中村
はい。

小松電機産業株式会社松江本社　太陽ホール

以下、資料



一村一志運動パンフレット

佐賀県多久市　哲学の道　陶板でまちの歴史を伝えている

人と水シリーズ　周藤彌兵衛

岩を切りつづけて42年　意宇川の流れを変えた周藤彌兵衛

古来から、出雲の国・意宇郡日吉村(島根県八束郡八雲村)を流れる意宇川は数年おきに洪水を繰り返す暴れ川でした。この世と黄泉"よみ"の国(死の国)との堺である聖山としてあがめられてきた剣山に流れをさえぎられて、強い雨が降るとたちまち氾濫し、田畑や家を、ついには村の人々の命までも奪い去ってしまうのでした。

そんな洪水の苦しみから、村人を救うために立ち上がった一人の男がいました。日吉村で下郡"したごおり"(大庄屋)をつとめる周藤彌兵衛は洪水の元凶である岩山・剣山をくり貫き、意宇川をまっすぐに流れるようにしようと決意したのです。

宝栄3年(1706年)、56歳にして一念発起した周藤彌兵衛は、剣山を切り抜く工事に取りかかりました。以来42年間、くる日もくる日も槌とノミでで岩を切り開くという苦業に立ち向かい、ついに延享4年(1747年)、97歳にして「日吉切通し」を完成させ、意宇川の流れを変えることに成功したのです。
宝暦2年(1752年)周藤彌兵衛は102歳で大往生をとげました。それから240年余りの歳月が流れた今日、「日吉切通し」を流れ落ちる水音は絶えることなく、流域の人々に意宇川の恵みをもたらしています。

漫画

「治水の英雄伝周藤彌兵衛」

著者:　小室　孝太郎
定価:1.300円

小説

「治水の偉人　周藤彌兵衛」

著者:　交易場　修
定価1.400円

朗読テープ

児童文学　武藤　裕子
小　　説　木村　須美子

定価:6.000円

児童文学

「川の流れを変えた人周藤彌兵衛」

著者:　村尾　靖子
定価1.300円

漫画・児童文学・小説

三冊組「ケース付き」
定価4,000円

人と水シリーズ　清原太兵衛

江戸中期、宍道湖の水害を防いだ76歳の役人　清原太兵衛の偉業

江戸時代の宍道湖沿岸の町や村は、度重なる水害に苦しんでいました。
元禄15年(1702年)6月の大雨で、宍道湖は約2メートルも水面が高くなり、多くの人が舟で救い出されました。
そして、その年の8月にも水害によって斐伊川の堤防が出雲市のあたりで破れ、8万石もの穀物が失われました。

享保6年(1721年)には、大風雨で数百戸の家が流され、4万石の穀物が失われました。また次の年にも同様の被害を被ったということです。
この時、農家生まれの太兵衛は10歳でした。
その後松江藩の役人になった太兵衛は、数多くの苦難の中76歳で治水工事を完成させました。
21世紀の我が国の社会は、高齢化が急速に進み、環境の悪化が心配されています。その予測は私たちの未来を暗く感じさせ、人々はせつな的な生き方に走りがちになります。
しかし、与えられた現実を厳しく見つめ、74歳の高齢でありながら治水工事の企画と監督に命をかけた清原太兵衛の生き方は私達に大きな励ましを与えてくれます。
現代の危機を嘆く前に、私たちは志高い先人の足跡に学び、未来に希望の灯を掲げる高い志を育てたいものです。
今、清原太兵衛の生涯を描いた漫画・児童文学・小説の三部作を刊行するのは、多くの人々、特に若い人とその志を共有したいからです。

漫画

「治水の偉人伝　清原太兵衛」

著者:　小室　孝太郎
定価:1.365円

小説

「治水の偉人　清原太兵衛」

著者:　寺井　敏夫
定価1.470円

朗読テープ

児童文学　林　訓子
小　　説　木村　純子

定価:6.000円

児童文学

「川を作った人　清原太兵衛」

著者:　村尾　靖子
定価1.365円

漫画・児童文学・小説

三冊組「ケース付き」
定価4,200円

人と水シリーズ　大梶七兵衛

開拓と治水に生涯をかけた大梶七兵衛の偉業

国譲りの神話の舞台、縁結びの地として知られる出雲地方。
この物語の主人公である大梶七兵衛は、三代将軍徳川家光によって幕藩体制がかくりつされようとしていた1621年、出雲国神門郡古志村(島根県出雲市古志町)に生まれました。
七兵衛翁は、69歳でその生涯を終えるまで、私財を投じて荒木浜開拓、高瀬川、差海川、十間川の開削等、治水の大事業に取り組み、現在に至るまで多くの人に恩恵をもたらしました。
「農は国の本なり」とする幕府政策のもと、松江藩でも新田や水利の開発が積極的に行われていました。七兵衛は一農民でしたが、確かな技術の裏づけをもって偉大な構想を提言し、強いリーダーシップにより難工事をすすめました。
310余年を経てなお語り継がれる翁の志は、現代日本の混迷した社会情勢のなかで、私達の心の中に鮮やかに浮かび上がるように思われます。

1988年開塾の知革塾にはじまる人間自然科学研究所は、環境・健康・平和をテーマに、先人の遺業を学ぶなかから日本はもとよりアジア、世界の未来を拓く「一村一志運動」を提唱しています。
出雲地方における治水の偉人、八雲村・意宇川の切通し開削「周藤弥兵衛」(1994年刊行)、鹿島町・佐太川開削「清原太兵衛」(1997年刊行)、このたびの出雲市「大梶七兵衛」を日本で初めての企画である児童文学、小説、漫画の三部作により出版、『出雲三兵衛』として世に送り出すことができました。
命は無限、生命は有限、高い志は時空をこえて人々の心の中に蘇ります。
本書と出会った方々の人生に新たな物語がはじまり、全国・世界へこの運動が広がることを念じています。

漫画

「治水の偉人伝　大梶七兵衛」

著者:　寺戸　良信
定価:1.365円

小説

「治水の偉人　大梶七兵衛」

著者:　寺井　敏夫
定価1.470円

朗読テープ(小説)

木村　須美子

定価:6.000円

児童文学

「川の流れを変えた人　大梶七兵衛」

著者:　村尾　靖子
定価1.365円

漫画・児童文学・小説

三冊組「ケース付き」
定価4,200円

朗読テープ(児童文学)

木村　須美子

定価:6.000円

周藤弥兵衛　清原太兵衛　大梶七兵衛は小説、児童文学、漫画、朗読テープがセットになり、各年代にあわせて、また車の運転中やハンディキャップがあっても偉人伝を理解できるように工夫されている。

(人間自然科学研究所ホームページより)

出雲市今市町にある大梶七兵衛像

地図：http://goo.gl/maps/CQ44L

出雲市大社町荒木にある大梶七兵衛顕彰を中心にした公園

地図：http://goo.gl/maps/X5Tct

出雲市大社町荒木の大梶七兵衛像

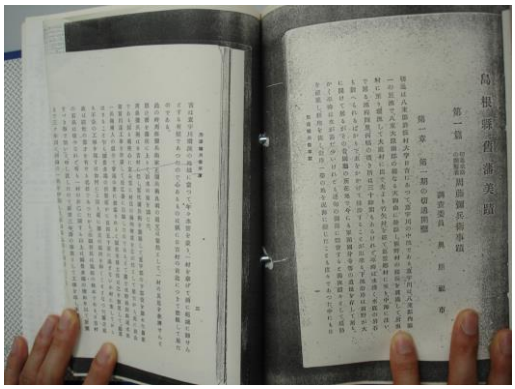
出雲市大社町荒木の高瀬川改修記念碑

出雲市大社町、旧大社駅近くにある大梶七兵衛顕彰碑

地図：http://goo.gl/maps/IkbcE

旧大社駅

地図：http://goo.gl/maps/mc0Dj



周藤弥兵衛正史　人間自然科学研究所管理（写し）

1995 年４月の周藤弥兵衛シンポジウムを報道した新聞記事

周藤弥兵衛シンポジウムの収録テープや、テレビ放送を録画したテープ

小説「清原太兵衛」を発刊するために、顕彰小説が募集された

偉人・周藤弥兵衛の伝記
HNS研究所が出版
松江で記念シンポ開く

周藤弥兵衛の伝記出版を記念して開かれたシンポジウム＝松江市千鳥町、ホテル一畑

島根県八雲村を洪水から救った江戸時代の偉人・周藤弥兵衛の一生を描いた伝記がHNS（人間・自然・科学）研究所（松江市、小松昭夫代表）により刊行され、二十八日、松江市内のホテルで出版を記念するシンポジウムが開かれた。

同研究所は、制御機器メーカーの小松電機産業（八雲村、小松昭夫社長）が昨年十月に設立。地元の先人の偉業紹介を通して郷土愛をはぐくもうと伝記出版の準備を進めてきた。

周藤弥兵衛は、八雲村の治水に生涯をささげた人物で、五十歳代半ばから四十年余りにわたり岩山を削り、はんらんを繰り返していた意宇川の流れを変えた。伝記は各年齢層が手にできるように、児童文学、小説、漫画をそろえ、初版本としてそれぞれ五千部出版した。三種類ともハードカバーの単行本で、小説千四百円、児童向けと漫画は千三百円で、三冊セットもそろえており、島根県内十九の指定書店などを通じて販売する。

出版記念シンポジウムには二百八十人が参加。長野忠・山陰中央新報社論説主幹をコーディネーターに、各本の作者や治水関係者らが史実をたどりながら弥兵衛の業績を検証した。八雲村では周藤弥兵衛の顕彰準備委員会が動き出しており、会場では弥兵衛の偉業を音楽で表した八雲小の創作曲がビデオで紹介された。

（山陰中央新報　H7.4.29）

山陰

自分たちの町を、地に足着いた日々の営みを大切に思う暮らしの中から、少しずつ地域が変わってきている。食品の安全や環境に対する組合員の関心を活動の基礎に置く鳥取県生協。郷土の先人たちの足跡をさまざまな形で残し、次代につなごうとする島根県の人々の試み。二十一世紀へのカウントダウンが始まった今、山陰各地で躍動感あふれる動きが続いている。

「郷土の偉人」を発掘
一村一志運動を提唱
HNS研究所が伝記

現代によみがえった「清原太兵衛」の物語。写真は漫画版

時の流れに埋もれた郷土の人々を掘り起こそう——松江湖南テクノパークにある「HNS（人間・自然・科学）研究所」（松江市乃木福富町）が展開しているユニークな「一村一志運動」。これまでに、二人の「偉人」の伝記出版が実現している。

同研究所は地元企業、小松電機産業㈱の小松昭夫社長が設立。現代社会の行き詰まりを打開するため、人と自然、科学の関係を一から見直すことをテー

この「一村一志運動」もその一環。事業者を募り、地域に貢献した先人の活動を、小説、児童文学、漫画の形で広く紹介し、これからの社会を考える一助としていく。

これまでに登場したのは「清原太兵衛」と「周藤彌兵衛」。ともに江戸時代、島根の地で水害から人々を守るためにすべてをかけて尽力した人物で、「清原太兵衛」は鹿島町が合併四十周年記念事業として製作したものだ。原作（小説）は一般公募され、遠く北海道からも問い合わせがあったという。

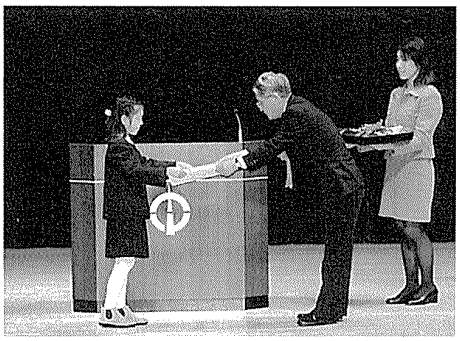
同研究所の佐々木武男本部長は、「今の子どもたちはさめているといわれるが、寄せられた感想文を読むと、率直に感動し、困難に自分で立ち向かおうという思いも読み取れる。これからの時代、それが大切ではないでしょうか」と話す。

今後、賛同者を募り、全国展開していきたい考えだ。

HNS（人間・自然・科学）研究所は☎〇八五二（二一）八

（朝日新聞　H10.5.30）

清原太兵衛ゆかりの佐太神社にて
（現地説明会）



読書感想文表彰式

シンポジウム・パネリスト

基調講演：
藤岡大拙 島根女子短大学長

◎清原太兵衛顕彰出版記念事業『記録集』より

はじめに

湖岸から望む宍道湖の夕景は、幻想的な雰囲気をただよわせて、絵のように美しい。訪れる旅人たちは、出雲の国の原風景に出会い、思わず感嘆の声を発するのである。景色ばかりではない。宍道湖は「宍道湖七珍」でも知られるように、味覚の宝庫である。だが、今はおだやかに水をたたえる湖も、かつて寛永年間（江戸初期）の大洪水で、出雲の大河「斐伊川」が流れを変えてから氾濫を繰り返すようになり、沿岸の村や町を洪水の渦で巻き込んだ歴史をもっている。

車で松江温泉を西に湖岸線を走ると、やがて浜佐田の新茶屋前橋に差しかかる。北に真っ直ぐに伸びている川がある。すぐそれが人工のものであることがわかる。宍道湖から日本海（恵曇）に通じた「佐陀川」、「清原太兵衛」が心血を注いで開削したものである。この開削によって、積年の水禍を免れ、鹿島、松江をはじめ沿岸の諸地域の産業経済文化が発展してきた。しかし、この治績は、とかく忘れられ勝ちであった。

鹿島町は、平成８年に合併40周年の記念すべき年を迎えられ、記念事業として『清原太兵衛翁の高い志』を顕彰することによって、今後の発展の道筋を学び未来に生かすことを願って顕彰出版を企画された。

この企画にあたって、『郷土の人々の環境と生活のために生涯を捧げた偉大な先人にスポットを当て現代に甦らせ、その足跡をたどることで未来への道筋を発見する。』一村一志運動の提唱者小松昭夫氏が主宰するＨＮＳ（人間・自然・科学）研究所に委託され、漫画・児童文学・小説の３部作として出版された。

小室孝太郎氏（漫画）、村尾靖子氏（児童文学）の両作家に執筆が依頼された。また、小説は、懸賞小説として公募したところ、現地見学会など開催する中で、北は北海道、南は九州の各地から関心を寄せられた。応募作品の中から、寺井敏夫氏の作品が最優秀賞に輝き出版の運びになった。

その後、清原太兵衛顕彰会では、「清原太兵衛シンポジウム」を開催され、広く太兵衛翁の治績の顕彰と偉業の継承に努められた。その一環として小中学生の読書感想文を募集されたところ、339編の応募があり一部をここに収録した。

今、小中学生の問題がクローズアップされている。「さめている」「きれている」「表情がない」など、さまざまな言葉で指摘され、「心の教育」が叫ばれながら問題は深刻化している。しかし、この子供たちの感想文を読み、「素直に感動している子供たち、自分の夢をふくらませている子供たち、何をなすべきか模索する子供たち」に驚きと期待を抱かずにはいられない。大人が何をなすべきか問われている。

本書は、この一連の活動の記録集である。熟読いただき各地でこのような試みの輪が広がることを期待してやまない。　　平成10年５月１日

清原太兵衛顕彰事業、懸賞小説審査委員長

藤岡大拙（島根県立女子短期大学学長）

清原太兵衛顕彰会が鹿島町内の小学生、中学生を対象に清原太兵衛の本を読んだ後での感想文を募集したところ、339編の応募がありました。

審査の結果、最優秀賞に３名（小学校低学年の部・高学年の部・中学校の部各１名）が入賞。ここに最優秀賞の感想文を掲載いたします。

□「清原太兵衛」を読んで

東小学校３年　　木村愛実

わたしが清原太兵衛という人を知ったのは、鹿島町の社会科の副読本を読んだ時でした。

はじめは、川を作った人であるということだけしかわかりませんでした。でも、この本を読んではじめていろいろなことを知りました。

佐陀川は、雨がふったときは水がにごり、水かさがふえ流れがはやくなり、流されていきそうです。わたしがいつも見ているそんな佐陀川が、人の手で作られたなんて、ふしぎでした。川はしぜんにできたものだ、と思っていたからです。それが、何百年もむかしに、人の力で作られたなんてしんじられません。

今のように、大がたダンプカーやクレーン車のない時代に、人の力だけでできるなんてすごいと思います。

わたしが一番心にのこったのは、自分の体のことよりも、人のことを心配して、川を作りたいと太兵衛さんが思ったところです。思いやりがある人だったんだなあと思いました。

それに、小さいころからのゆめを、あきらめないなんて、すごいと思いました。今、わたしにも、ゆめがありますが、大人になってもそのゆめをもっていられるか、自しんがありません。

太兵衛さんが工事をはじめられたのは、74才になってからだそうです。いやなことがあってもくじけずに、小さいときからずっと考えていたことを実行したのです。

何度も何度も反対する村の人たちに、せっかくうったくいをぬかれて、大へんだったんだろうなあと思います。太兵衛さんはくいをぬかれないようにするために、頭をつかい、村の人たちがねむっているあいだに、くいうちは終わったそうです。わたしは、太兵衛さんはいつねむったのかなと思いました。

川ぞこをほるさぎょうは、頭の中で考えていたこととは大ちがいで、かなりむずかしそうでした。

太兵衛さんは、朝のまだうすぐらいころから江角の海岸へ行って、つめたい海の中に入り、体を清めたそうです。つめたくて、こごえ死にそうだったことでしょう。太兵衛さんは、じっとだまって入ったそうです。わたしは、つらい思いを何度もしたんだなと思いました。

1787年の秋の終わりごろに、佐陀川はかんせいしました。よろこんでいる人々の声が聞こえるようで、わたしもうれしくなりました。

わたしは、太兵衛さんの本を読んで、いろいろなことを知りました。その知ったことは、今では考えられないことばかりでした。

友達のうちに遊びに行くときにいつも見る佐陀川は、よくごみがういています。

この佐陀川はたくさんの人の力と苦労のおかげで作られたことを思い、わたしたちは、この川をよごさないように、川を大切にしていかなければならないと思います。

□ありがとう！　清原太兵衛さん

恵曇小学校４年　　坂本優希

私が住んでいる町は、太兵衛さんが作ってくれた佐陀川の近くの古浦です。川には、みなと橋がかかり、古浦と恵曇の町を結んでいます。私たちが松江に用がある時は、佐陀川をながめながら横の道を通って行きます。

４年生になって、社会科で太兵衛さんの事を習いました。いつも見ていた佐陀川が太兵衛さんの作った川だと知ってビックリしました。あんなに長くて大きい川がどうしてできたのか、知りたくなりました。本を読んだり、佐陀川見学にも行きました。太兵衛橋や太兵衛きねんひなどいろいろなものを見ました。そして、私は、太兵衛さんてすごい人だったんだなぁと思いました。

昔、宍道湖の水が大雨がふるたびにあふれ、大きなひがいが出ているのを見て、

「ぼくがこう水をなくしてやる。」

と、小さいのに国を救おう!!と考えるなんて私にはそうぞうがつきません。私だったら、こんなこう水とかがあっても人がするからいいや、と思うにちがいありません。でも太兵衛さんはちがいました。どうしたらこう水がなくなるかずーっと考えて、何回も工事願書を出して、12回目でやっと願いがかなったのです。一度思った事は、かなうまであきらめない太兵衛さんの気持ち、私もそんな強い心がほしいです。

工事がはじまって、うなだと、かたの内のところはどしゃがくずれて、作業をしていた人たちがどろにのまれてたくさんなくなりました。

その時も太兵衛さんはあきらめず、お百度まいりをして工事がぶじに終わるように祈りました。佐太神社のたたりだと言われても、まけないでがんばった太兵衛さんって、本当にすばらしいと思います。

太兵衛さんのことを知るまで、私は、佐陀川をただなんとなく、見ていました。でも太兵衛さんや工事をいっしょうけんめいにした人たちについて勉強をして、今までとはちがう川のように見えてきました。いろんな人のくろうを合わせてできた川、佐陀川。私たちのくらしを便利でゆたかにしてくれる川です。

私も、太兵衛さんのように、次の時代によろこばれる何かをしたいと思います。その何かはまだ分からないけど、たくさんの勉強をしたり、いろんなことにちょうせんして、みつけていきたいと思います。

ありがとう清原太兵衛さん。

そしてずっと私たちを見守っていて下さい。

□清原太兵衛について

鹿島中学校３年　　安達洋子

私はあまり佐陀川に縁がなく、家も近くないし、学校の登下校の道も川の近くを通りません。だから、この川を見るのは学校の音楽室と、松江市内へ行く時だけです。

私は、その音楽室から見える景色がとても好きです。そこからは、校庭に立ち並

ぶ桜の木と、その背後にどっしりとかまえた佐陀川が見えます。この川を高い所から見下ろすととても大きく、とても広く見え、とても穏やかな気持ちになります。

春は桜が咲き匂い、花弁は川の方へと散っていきます。佐陀川は、花弁だけではなく、桜そのものを飲み込んでしまうような、そんな迫力さえ感じさせます。そういう風に感じるのは、やはり、清原太兵衛と、太兵衛の率いた作業者達の川への強い思いがあったからだと思います。

この佐陀川をつくった、清原太兵衛という人の名前は、小さい頃から学校や家で何度も聞かされていて知ってはいましたが、太兵衛の生涯については何一つ知りませんでした。興味すらわかず、ずっとこのまま名前だけのおじいさんで終わるところでした。

しかし、今は違います。太兵衛の夢や人生、考えを知ってからは、私にとって憧れの人のような存在になりました。

太兵衛には、幼少の頃から夢がありました。洪水から村を守ることです。太兵衛の住んでいた村は、毎年暴風雨に襲われ、嵐の過ぎ去った後はひどいものだったそうです。いたるところに転がっている家畜の死がい。鼻をつくにおい。病に倒れる人。大きなどろ水の川となってしまった村。そんな時倒れた父。太兵衛の目に映るのは、暗く悲しいことばかりでした。

だから、もう二度とそんな風景を見なくてすむように、という思いがこの夢にはあると思います。そして、この夢を決して忘れることなく、寝る間も惜しんでひたすらその一つの夢を追いかけていた太兵衛の姿勢を知り、自分も夢をあきらめたらいけないなと思いました。どんなに無理だと思うことでも、その夢のために毎日こつこつとがんばれば、いつか、清原太兵衛のようにおじいさんになってからでも、きっとかなうんだというような気持ちになりました。

もちろんその夢をかなえるためには、いろいろと苦しんだりする時期もあると思います。太兵衛も、付近の住民の抵抗や土質の悪さ等多くの問題にぶちあたり、何度も克服して、そして川をつくりました。時には、一緒に戦った作業者の命を失うこともありました。それでも夢をあきらめなかったこと、そういう人が、かつてここに存在したということが、私にはとてもはげみになります。

私には、まだ年齢的にも若いということもありますが、ただ一つの何かのために、苦しんだり泣いたり、危ない橋を渡ろうと思ったこともありません。それに、これからの人生で、自分を捨てて必死になるということが無いというのも嫌です。間近で見ても、テレビで見ても、何かのために必死になっている人は、とても素敵だと思います。そして、必死になった分だけ、その分だけ結果を残しています。清原太兵衛は、とても長くて大きな川を残しました。それは今になっても多くの人達に使われ、役立っています。

清原太兵衛がいたから、今この町で米が作られ、清原太兵衛がいたから、今水害で悩むこともありません。もしいなかったら。そう考えると、この人は私達の恩人です。

今、私には夢があります。その夢はまだまだ遠くて、細かいところでいろいろと迷っています。でも、清原太兵衛のように、あせらず、ゆっくりと考えていこうと思います。

青の洞門　　出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

青の洞門（あおのどうもん）は、大分県中津市本耶馬渓町の山国川に面してそそり立つ競秀峰の裾にある洞門（隧道、トンネル）である。全長は約 342 メートル。1763 年（宝暦 13 年）4 月完成といわれている。

昭和時代に作られた青の洞門。この中の右手に禅海和尚の洞門がある。

禅海和尚が掘った青の洞門（一部）は徒歩でのみ通行可能

諸国遍歴の旅の途中ここに立ち寄った禅海和尚は、断崖絶壁に鎖のみで結ばれた難所で通行人が命を落とすのを見て、ここにトンネルを掘り安全な道を作ろうと、托鉢勧進によって掘削の資金を集め、石工たちを雇って「ノミと槌だけで 30 年かけて掘り抜いた」といわれている。この逸話を元にして書かれたのが菊池寛の『恩讐の彼方に』であり、「青の洞門」はこの小説の中で命名されたものである。

現在は、自動車を通過させるため（旧国道 212 号）、完成当時よりかなり変形しているが一部にノミの跡が残っている。地形の関係上車幅が狭く、信号を使った交通整理が行われている。

開通後、禅海が通行人から通行料を徴収したという話が伝わっており、この洞門は日本最古の有料道路とも言われている。

1950 年（昭和 25 年）に耶馬日田彦山国定公園に指定。晩秋の紅葉時期は特に観光客が多い

恩讐の彼方に　　出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

『**恩讐の彼方に**』（おんしゅうのかなたに）は、大正 8 年（1919 年）1 月に発表された菊池寛の短編小説である。江戸時代後期に、豊前国（大分県）の山国川沿いの交通の難所に、青の洞門を開削した実在の僧（禅海）の史実に取材した作品である。しかし、禅海は小説の主人公である了海（俗名・市九郎）のように独りで掘り続けたのではなく、托鉢勧進によって掘削の資金を集め、石工たちを雇って掘ったものであり、当然、敵討ちの話も、菊池の創作である。

越後国柏崎生れの主人公、市九郎は、主人である浅草田原町の旗本、中川三郎兵衛の愛妾であるお弓と密通し、それが三郎兵衛の知るところとなり、手討ちされそうになる。とっさに

反撃に出た市九郎は、逆に三郎兵衛を斬ってしまう。市九郎は、茶屋の女中上がりのお弓にそそのかされて出奔、中川家は家事不取締に付き、お家断絶と沙汰される。

東山道の鳥居峠で茶屋を開いた市九郎とお弓は、表の顔は茶屋の夫婦であるが、その裏で人斬り強盗を生業として暮らしていた。

江戸出奔から 3 年目の春、自らの罪業に恐れをなした市九郎は、お弓の許を離れ、美濃国大垣在の真言宗美濃僧録の寺である浄願寺で、明遍大徳の慈悲によって出家を果たし、法名を了海と名乗り、滅罪のために全国行脚の旅に出た。

享保 9 年(1724 年)秋 8 月、赤間ヶ関、小倉を経て、豊前国に入った市九郎は、宇佐八幡宮に参拝し、山国川沿いにある耆闍崛山羅漢寺を目指した。樋田郷に入った市九郎は、難所である鎖渡しで事故によって亡くなった馬子に遭遇した。そこで、その難所の岩場を掘削して、事故で命を落とす者を救おうという誓願を立てる。

近在の人々は、そんな市九郎を狂癡の僧として扱い、見向きもしなかった。しかし、それが多年にわたると、何度か石工を雇って力を合わせようとするが、難工事のゆえに、長続きすることはなく、また、市九郎一人に戻る始末であった。

月日が経って、18 年目の終りになり、中津藩の郡奉行に計らいにより、ようやく石工を雇って、掘削作業を進めることができるようになった。

三郎兵衛の子、中川実之助は、父の死んだ時は、3 歳であった。親類の許で養育され、13 歳で父の非業の死の顛末を知る。実之助は、柳生道場に入門し、19 歳で免許皆伝、仇討ちのため、27 歳まで諸国を遍歴し、九州に入って福岡城下から中津城下へ来た。そこで、市九郎と素性が一致する了海という僧が、山国川の難所で艱難辛苦の最中であることを知り、現場に急行する。

市九郎は、親の仇を名乗る実之助の前で、素直に斬られることを望むが、石工たちが必死に止めに入ったため、石工の統領の計らいで、洞門の開通まで仇討ちは日延べすることとなる。

市九郎が掘り始めてから 21 年目、実之助が来て 1 年 6ヵ月、延享 3 年(1746 年)9 月 10 日の夜九つ近く、ようやく洞門は開通する。

高瀬川(たかせがわ)
江戸時代初期に角倉了以・素庵父子によって、京都の中心部と伏見を結ぶために物流用に開削された運河である。 開削から大正 9 年(1920 年)までの約 300 年間京都・伏見間の水運に用いられた。 現在は鴨川において京都側と伏見側で分断されており、上流側を高瀬川、下流側を東高瀬川、新高瀬川と呼ぶ。 京都中心部の三条から四条あたりにかけては京都の歓楽街の一つとなっており、また桜の名所ともなっている。

2007 年 3 月 16 日　horie kenji